

白河街区跡・岡崎遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報
二〇〇四
一七

白河街区跡・岡崎遺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

白河街区跡・岡崎遺跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび配水管布設替工事に伴う白河街区跡・岡崎遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

平成17年3月

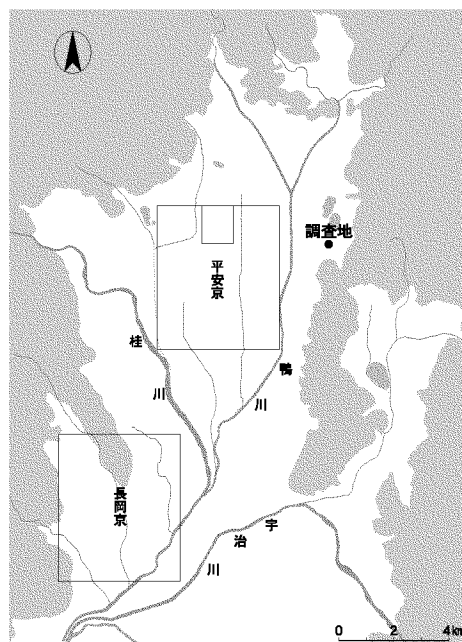
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 白河街区跡・岡崎遺跡
- 2 調査所在地 京都市左京区岡崎南御所町・岡崎法勝寺町
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次
- 4 調査期間 2005年1月11日～2005年3月9日
- 5 調査面積 182m²
- 6 調査担当者 吉村正親・長宗繁一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「岡崎」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 本書作成 吉村正親・長宗繁一
- 17 編集・調整 児玉光世

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺部の調査	1
3. 遺 構	3
4. 遺 物	8
(1) 土器類	8
(2) 瓦 類	9
5. ま と め	13

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	A 1 区 T 1 全景 (西から)
		2	A 1 区 T 2 全景 (西から)
		3	A 1 区 T 3 全景 (西から)
		4	A 1 区 T 4 全景 (西から)
図版 2	遺 構	1	A 2 区 T 1 全景 (西から)
		2	A 2 区 T 2 全景 (西から)
		3	A 2 区 T 3 全景 (西から)
		4	A 2 区 T 4 全景 (西から)
図版 3	遺 構	1	A 2 区 T 5 全景 (西から)
		2	A 3 区 T 1 全景 (西から)
		3	A 3 区 T 2 全景 (西から)
		4	A 3 区 T 3 全景 (西から)
図版 4	遺 構	1	A 3 区 T 4 全景 (西から)
		2	A 3 区 T 5 全景 (東から)
		3	A 4 区 T 1 全景 (南西から)
		4	A 4 区 T 2 全景 (西から)
図版 5	遺 構	1	A 4 区 T 3 全景 (南西から)
		2	A 4 区 T 4 全景 (西から)
		3	A 4 区 T 5 全景 (西から)
		4	A 5 区 T 1 全景 (西から)

図版 6	遺構	1	A 5 区 T 1 土壇 16 (南から)
		2	A 5 区 T 2 土壇 14 (南西から)
図版 7	遺構	1	A 5 区 T 2 全景 (西から)
		2	A 5 区 T 3 全景 (西から)
		3	A 5 区 T 4 全景 (西から)
		4	A 6 区 T 1 全景 (西から)
図版 8	遺構	1	A 6 区 T 2 全景 (西から)
		2	A 7 区 T 1 全景 (南から)
		3	A 7 区 T 2 全景 (北から)
		4	B 1 区 全景 (南から)
図版 9	遺構	1	B 2 区 全景 (南西から)
		2	B 4 区 全景 (南西から)
		3	B 6 区 全景 (南西から)
		4	B 7 区 全景 (北から)
図版 10	遺物		軒丸瓦・丸瓦
図版 11	遺物		軒平瓦

挿 図 目 次

図 1	調査前全景 (西から)	1
図 2	調査風景 (西から)	1
図 3	調査位置図 (1 : 2,500)	2
図 4	A 1・2 区、B 1・2 区遺構実測図 (1 : 200、断面図縦方向のみ 1 : 100)	4
図 5	A 3・4 区遺構実測図 (1 : 200、断面図縦方向のみ 1 : 100)	5
図 6	A 5 ~ 7 区、B 4 区遺構実測図 (1 : 200、断面図縦方向のみ 1 : 100)	6
図 7	A 5 区 T 1 土壇 16 出土土器実測図 (1 : 4)	9
図 8	軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	10
図 9	丸瓦・平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	11

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	12

白河街区跡・岡崎遺跡

1．調査経過

京都市上下水道局による配水管の布設替工事が実施されることとなった。当該地は、平安時代後期に造営された六勝寺の一つである法勝寺跡にあたることから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により発掘調査を実施することになった。調査地は、京都市左京区岡崎南御所町（岡崎通東側歩道）と岡崎法勝寺町（二条通南側歩道）にまたがる。『京都市遺跡地図台帳』によると白河街区跡（417）、法勝寺跡（417-01）、岡崎遺跡（418）の推定地となっている。（図3参照）

今回の調査区間のうち、二条通は法勝寺の伽藍の中心を東西方向に通るため、その成果が期待された。そのため、予定区間を可能な限り全面発掘調査することとし、一週間単位を目安としたA調査と、1日単位で実施するB調査を実施することとし、各々の調査区を設定した。調査は2005年1月11日から開始し、3月9日に終了した。

2．周辺部の調査

六勝寺跡では、京都会館建設時の尊勝寺跡の調査¹⁾に始まり、旧勤業館、府立図書館、岡崎グラウンド、武道センター、市立動物園など大規模な調査が実施され、大きな成果をあげている。今回調査の岡崎道の西側、岡崎グラウンド²⁾では、二条大路北側側溝や築地の地業跡が検出されている。また二条通に面する法勝寺金堂基壇³⁾は、現状でも丘の様相を呈している。南側の市立動物園内では法勝寺塔跡や岡崎遺跡関係の調査が実施されている。しかしながら、六勝寺を含む白河街区全体の地割復元、法勝寺の寺域確定や主要伽藍の復元にまではいたっておらず、多くの課題が残されている。こうしたことから発掘調査での成果が待たれる現状にある。



図1 調査前全景（西から）



図2 調査風景（西から）

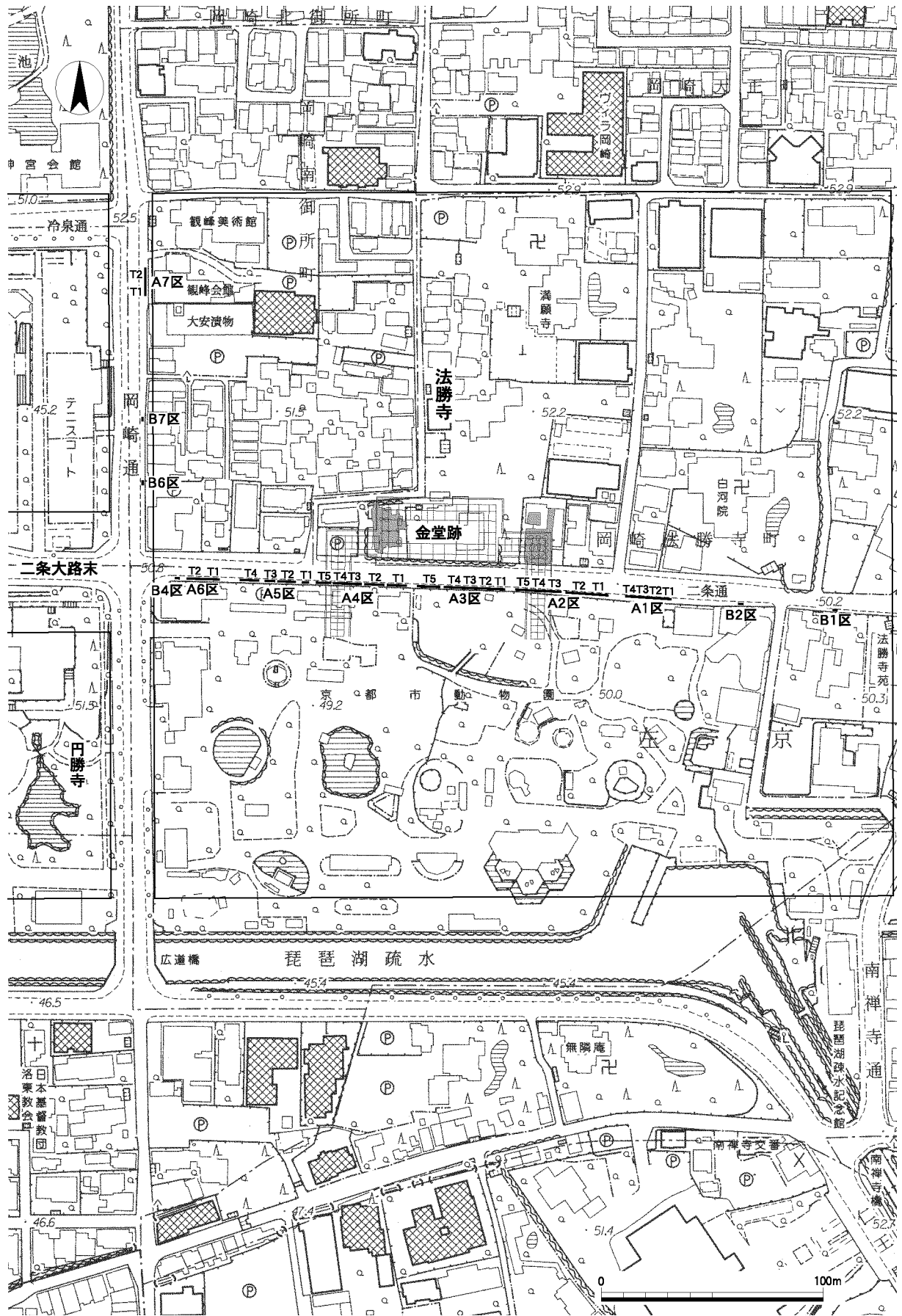


図3 調査位置図 (1 : 2,500)

3. 遺 構

調査は、道路の必要最小限の占有としたため、調査区を分割し、最長40mを1区画とし、それをA1～7区とした。また、調査の表土や排土を、この区画内に仮置きすることや、埋設管や電柱を避けるため、1区画を2～5分割(T1～5)して調査した。

調査地の幅は、全トレンチとも約1mであったが、A1～6区の二条通の調査区間では、南側半分が側溝工事により壊されていた。したがって、実際に残存していた幅は約0.5mであった。また、調査の深さについては、工事による掘削深度や安全を考慮してGL-1m前後とした。

他にグリッドとしてB1～7区を設けて、おもに手掘りで1日単位の調査を実施した。B3・5区については、埋設管や旧側溝で削平を受けていることが判明したため中止した。

すべてのトレンチは、歩道内にあり、インターロッキングないしはアスファルトにカッターを入れ、GL-0.5m前後までの盛土を重機により掘削した。以下手掘りによる調査を実施した。

調査は、岡崎道の区間北端に位置する観峰会館西側歩道上のA7区から開始したが、番号に従って進めた訳ではなく、あくまでも通行の安全を考慮して可能な所から順次実施した。

A1～6区間の基本的層序は、およそ標高51mで平均している。GL-0.4～0.6mで白川扇状地の砂礫となり、上面のGL-0.4mまでは近代の削平および攪乱を受けている。この下のわずかな部分に整地層が残存している。

掲載した断面図は、A1～6区は北壁で、A7区は西壁の断面である。平面的に検出した一部の遺構は、断面図に投影して記入した。

以下各トレンチの説明は、東から西へ、南から北へ順に記すことにする。

A1区(図4、図版1)

二条通の調査区間の内最も東に位置するトレンチで、T1～4を設定した。北半の一部にGL-0.3mで近代の堅い整地層があり、旧道路面とみられる。この下の層には遺物は伴わないが砂層に粘土塊の混じる埋め立て土(褐灰色砂泥)があり、さらにその下GL-0.6mで暗灰黄色砂礫層となっていた。

この砂礫層は、白川の流路による堆積である。

A2区(図4、図版2・3)

T1～5と5分割して、反転しながら調査した。そのT1・T2は、中央部を古い電柱や近代

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	A5区土壙14、A5区土壙16	
近 代	A4区土壙17、A4区土壙18、 A5区土壙5、A5区土壙6、A5区土壙13	

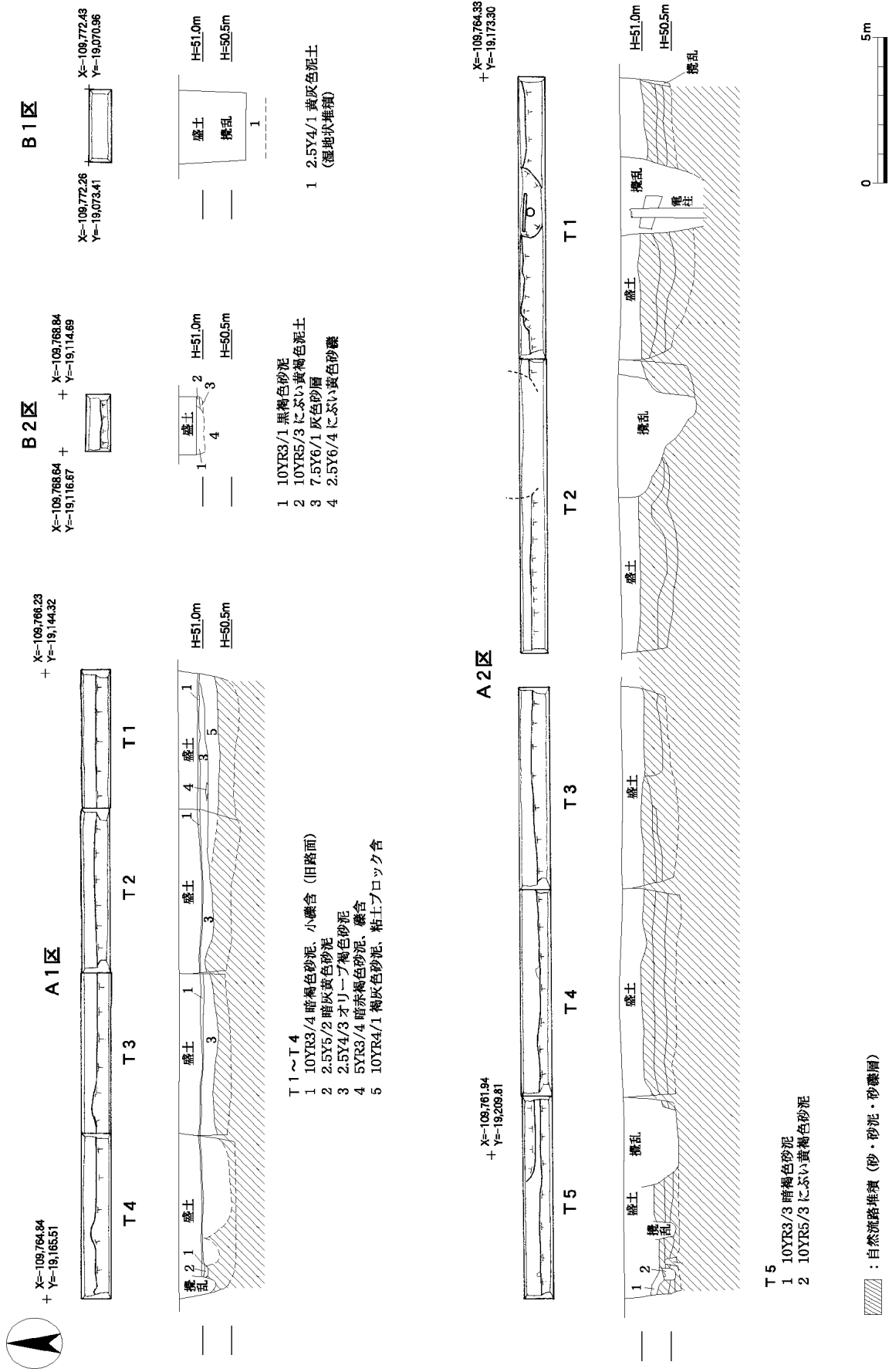
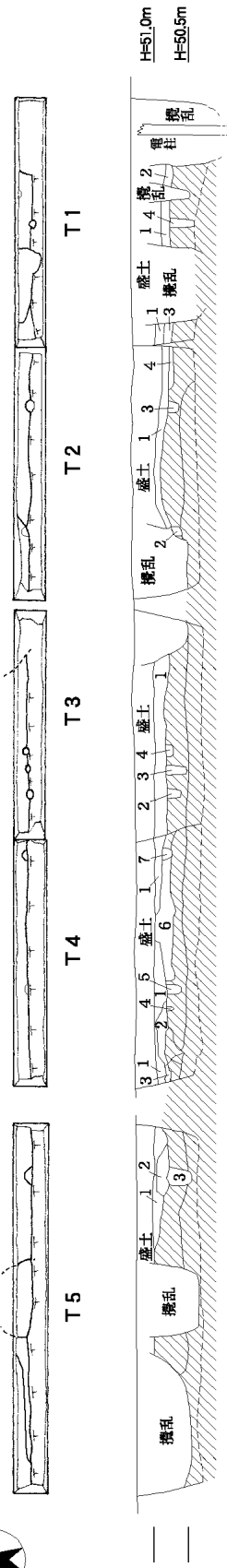


図4 A1・2区、B1・2区 土質堆積断面図 (1:200、断面図縦方向のみ1:100)

X=109,761.58
+ Y=19,219.17

A 3区

X=109,760.11
+ Y=19,288.79

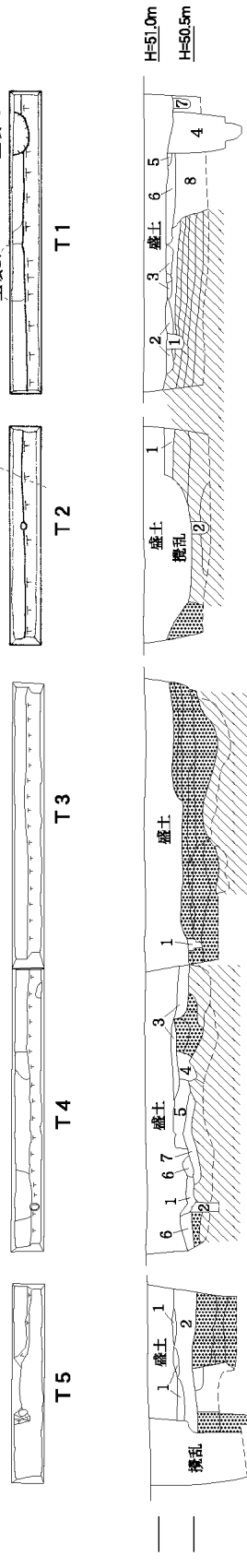


- | | | | | |
|--|--|---|---|--|
| <p>T 5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR2/3 黒褐色砂泥、粘質 2 10YR4/4 褐色砂泥 3 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (土壌) | <p>T 4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 3 7.5Y2/3 暗褐色砂泥、やや粘質 4 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥、小礫混 5 10YR3/4 暗褐色砂泥、小礫混 6 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭混 7 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (ピット) | <p>T 3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 2 10YR5/6 黄褐色砂泥 (ピット) 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (ピット) 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (ピット) | <p>T 2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・土器片混 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (ピット) 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (ピット) 4 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | <p>T 1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR2/3 黒褐色砂泥、粘質 2 10YR2/2 暗褐色砂泥 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 4 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 |
|--|--|---|---|--|

X=109,760.06
+ Y=19,263.69

A 4区

X=109,756.68
+ Y=19,303.33



- | | | | | |
|--|--|--|--|---|
| <p>T 5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 2 10YR5/8 黄褐色砂泥 | <p>T 4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR4/4 褐色砂泥 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (ピット) 3 10YR6/6 明黄褐色砂泥 4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (土壌) 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土器器合 6 10YR3/3 暗褐色砂泥、土器器合 7 10YR2/2 黒褐色砂泥、土器器少量 | <p>T 3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | <p>T 2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 (ピット) 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 (ピット) | <p>T 1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 10YR2/3 黒褐色砂泥 2 7.5YR2/1 黒色砂泥 3 10YR4/6 褐色砂泥 (土壌17、瓦溜) 4 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 (土壌18) 5 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 6 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 8 2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂泥 |
|--|--|--|--|---|

: 黒褐色・黒色砂泥
 : 自然流路堆積 (砂・シルト・粘土)

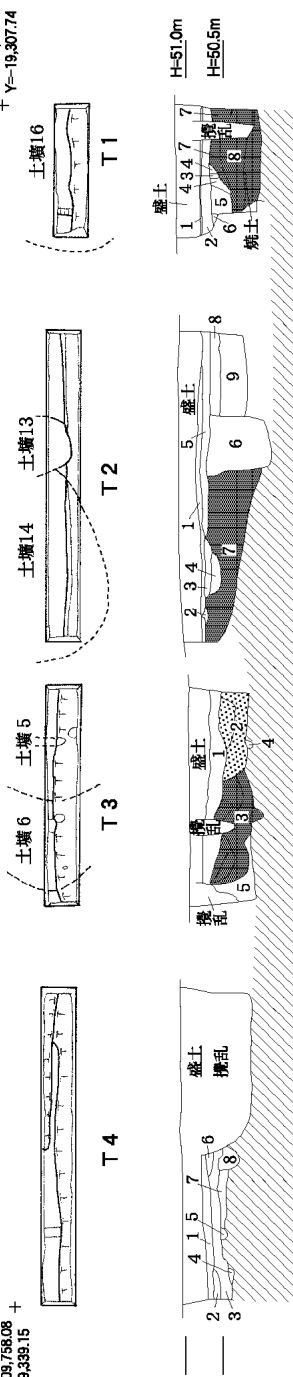


図5 A3・4区 断面図縦方向のみ (1:200、断面図縦方向のみ 1:100)



X=-109,758.08
Y=-19,338.15

A 5区



- T 1**
- 10YR2/1 黒色砂泥
 - 10YR4/4 褐色砂泥
 - 10YR3/3 暗褐色砂泥
 - 10YR4/6 褐色砂泥
 - 10YR4/6 褐色砂泥
 - 10YR7/4 にぶい黄褐色砂泥
 - 10YR4/6 褐色砂泥
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (土層16)

- T 2**
- 7.5YR1.7/1 黒色砂泥
 - 10YR4/6 褐色砂泥
 - 10YR4/6 褐色砂泥
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 - 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土層13)
 - 10YR2/3 黒褐色砂泥 (土層14)
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色
 - 10YR3/4 暗褐色砂泥

- T 3**
- 10YR2/3 黒褐色砂泥
 - 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 (土層5)
 - 7.5YR2/3 暗褐色砂泥 (土層6)
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ泥砂 (溝)
 - 2.5Y4/2 暗炭黄色砂泥

- T 4**
- 10R1.7/1 赤黒色砂泥
 - 10YR3/4 暗褐色砂泥
 - 10YR2/3 黒褐色砂泥
 - 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
 - 7.5YR3/3 暗褐色砂泥
 - 2.5Y4/3 オリーブ褐色
 - 2.5Y6/4 にぶい黄褐色
 - 10YR2/3 黒褐色砂泥、7の砂泥が混じる

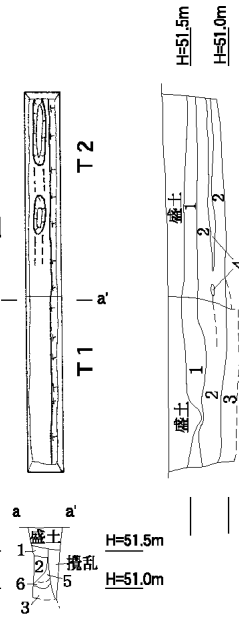
▨ : 自然堆積層 (黄褐色砂)



X=-109,621.66
Y=-19,383.44

A 7区

X=-109,631.58
Y=-19,383.47

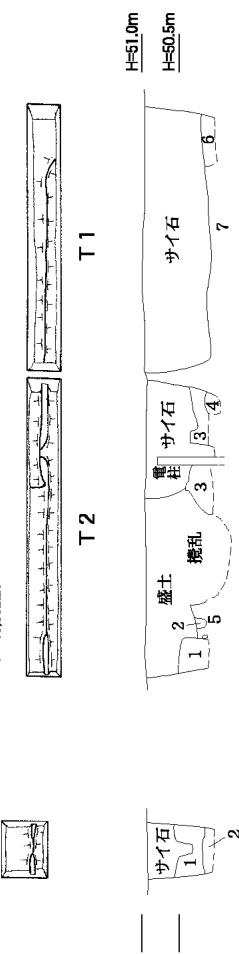


- T 1 ~ T 2**
- 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
 - 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
 - 10YR5/8 黄褐色砂
 - 2.5Y2/1 黒色泥砂
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
 - 10YR3/2 黒褐色砂泥



B 4区

X=-109,757.31
Y=-19,362.29



- T 1 ~ T 2**
- 10YR3/4 暗褐色砂泥
 - 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
 - 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
 - 2.5Y3/4 オリーブ褐色粗砂
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂
 - 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
 - 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、炭泥

図6 A 5 ~ 7区、B 4区補遺断面図 (1:200、断面図縦方向のみ1:100)

土壌で壊されていた。残っている部分では、GL - 0.4mより明褐色砂泥層となる。その断面を見ると流れ堆積を示すラミナ（葉理）が認められ白川の堆積である。T 3・T 4もGL - 0.4mで砂層となる。T 5は東端でアスファルトの入る攪乱や西端のピットが黄褐色砂泥層を切り込んでいたが、いずれも近代のものと思われる。

法勝寺金堂東翼廊推定部分に設定した調査区であったが、これに関連するとみられる遺構などの検出はなかった。

A 3区（図5、図版3・4）

法勝寺金堂の前面にあたる部分に設定した調査区である。T 1～5の5分割で実施した。

T 1では東に古い木製電柱痕が2ヶ所あり、他にも地中アンカー用の穴が大きく開けられ、さらに西半部は近代の攪乱により削平を受けていた。GL - 0.4mで暗褐色砂泥層となる。T 2は西端に攪乱と近代のピットが2ヶ所あって、東端に時期不明の暗灰黄色砂泥が広がっていた。この層は法勝寺の整地層の可能性がある。これ以下の層は自然堆積層である。T 3は、GL - 0.3mで近代の整地層と思われる黄褐色砂泥が広がる。この下には黄褐色砂礫層がみられ、上面でピット状の遺構を3ヶ所検出したが、時期は不明である。T 4は、近代のピットを2つと2ヶ所で暗褐色砂泥の入る土層を検出したが遺物が入っていなかった。以下は、自然堆積層である。T 5は、西半部で花崗岩の屑石の入る土壌とアスファルトの入る大きな攪乱で削平を受けていた。土壌を東端で検出したが、近代のものであった。GL - 0.4mで自然堆積層の黄褐色砂礫層となる。

A 4区（図5、図版4・5）

金堂西軒廊の推定地に設定したトレンチである。東からT 1～5を設定した。T 1は、東端に土壌18を検出し上部では少量の瓦が出土した。時期は、近代のものとはわかった。中央部には土壌17があり平安時代後期の瓦のみが入っていたが、土壌の時期については特定できなかった。T 2は西端部に黒褐色砂泥の溜まり、中央部には現代の攪乱の下にピットを検出したが、近代のものである。白川砂（黄褐色砂泥）はGL - 0.4mでみられ、その堆積断面にはラミナが認められた。T 3は、西半が、GL - 0.6mまで削平を受けていた。西端で近代の土壌である溝状の落込みを検出した。T 4は、西半が削平を受け、その下に近代のピットを検出した。また、中央部にもピットを検出したが、いずれも近代のものであった。中央のGL - 0.5mでは黒褐色泥砂の堆積がみられ、11世紀の遺物を含んでいた。T 5は古い電柱関係の地中アンカー用孔やコンクリートの電柱孔などが深く、著しく攪乱を受けていた。

A 5区（図6、図版5～7）

T 1では、トレンチの全体を土壌16が占めており、GL - 0.5～1.1mに瓦が多量に出土した。埋土は、暗オリーブ褐色砂泥を呈している。土壌中に1個凝灰岩の切石が入っていたので寺院に使用されたものと思われる。また12世紀末の土師器を含んでいた。T 2では、トレンチの西半で土壌14、これより新しく掘られた土壌13を検出した。土壌13は、この付近に類例がある浅い野井戸ではないかと思われ、近代のものであろう。土壌14は、瓦溜で平安時代後期の瓦が出土した。また、焼土も含まれていた。T 3は、近代の掘込みが多いが、土壌6を土壌5が切り取っている。

この底部でピット3基を検出したが、いずれも近代のものであった。T4は、東半部の攪乱土中に多数の布目瓦が出土した。北端部にも一部水道の攪乱を受けていた。西半で2枚の整地層を確認したが、時期が不明で、近世の水田整地か寺院の整地か不明である。

A6区(図6、図版7・8)

岡崎道、二条通交差点の南東部分にあたる。法勝寺の寺域を限る西側築地近くに設定した調査区である。T1・T2の2つのトレンチを設けた。T1は、西端部にわずかに土層が残るのみで、他は電力関係の地中管によって完全に破壊されていた。T2は、南側を側溝掘形、北側も電力関係の埋設管によって完全に破壊され、わずか15cm幅の土層が東西方向に残るのみであった。西大門跡に關係する痕跡は見られなかった。

A7区(図6、図版8)

トレンチ全体が近代の南北方向の溝であることがわかった。岡崎道と冷泉通末の丁字路にある観峰会館西側でT1・T2の2つのトレンチを設けた。上層には非常に硬い土層があって、10~20cm大の丸い石が多く入っていた。下層には南北方向の溝の痕跡があり、中に近代の遺物が入っていた。GL-0.7mで黄褐色砂層の地山を確認した。

B1~B7区(図4・6、図版8・9)

B1区は、区間東端の調査である。2.5m×1.0mで、GL-1.1mまで攪乱であった。その下は灰色泥土(湿地状)となっていた。

B2区は、2.5m×0.8mのトレンチで、西隣のA1区と似た状態を示しGL-0.4~0.5mでにぶい黄色砂礫となる。

B4区は、岡崎道と二条通の交差点南側歩道上で実施した。南北1.4m、東西1.5mのトレンチを設けた。ほとんど電力関係の埋設管で破壊されており、わずか15cm幅の土層を確認したのみである。この中には遺物は入らずGL-0.4mで白川砂となっていた。

B6・B7区は、岡崎道東歩道上で実施した。GL-0.15m下からコンクリートの旧側溝とその裏込土となり、いずれも土層観察はできなかった。

4. 遺物

今回出土した遺物は、岡崎遺跡(弥生時代から古墳時代)にかかわる時代のものと、六勝寺(法勝寺跡)にかかわる遺物であった。攪乱孔からも良好な瓦類の出土があり、参考遺物としても貴重なものとなった。ここに図示できるものは最大限掲載した。

(1) 土器類

古墳時代前期

ハケメを持つ土師器の小片で、おそらく甕片であると思われる。すべてA5区T2の整地層に

含まれていたものである。

平安時代後期（図7）

1～5で、1はコスタ型の土師器皿、2～5は口縁を2回ヨコナデする土師器皿で、12世紀前半である。A5区T1の土壌16より出土している。

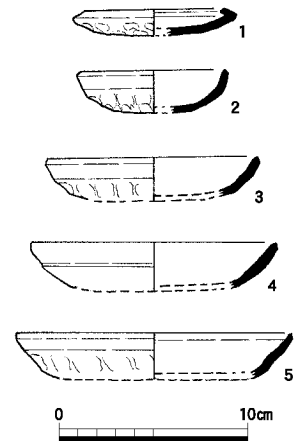


図7 A5区T1土壌16出土土器実測図（1：4）

（2）瓦類

攪乱から出土したものとA5区T2に集中して出土したものなどがある。

軒瓦（図8、図版10・11）

単弁蓮花文軒丸瓦（6） 範の彫りは浅く平面的で凹凸がない。

外区に小さな珠文があり、その外周に唐草文がめぐる。顎下端を強くヘラケズリして接合式である。A4区T1の攪乱より出土した。

三巴文軒丸瓦（7） 左巻き三巴文で、外区に太い珠文がめぐるもので、筒部との接合が浅く、ここから分離している。全体に燻しがかかる。A5区T2の土壌14より出土した。

三巴文軒丸瓦（8） 左巻き巴文で、三巴文になると思われ、外区に珠文がめぐる。凸面には縄目の叩きがすり消されている。A5区T1の攪乱より出土した。

三巴文軒丸瓦（9・10） 右巻き巴文で、三巴文になると思われる。外区に圈線が無く同一文であると思われる。チャートや石英が多い。いずれもA5区T1の攪乱より出土した。

梵字文軒平瓦（11） 五種の梵字を配し、左からバク・ウン・バン・キリーク・サクと読める。それぞれ如来、菩薩を表し、釈迦、阿閼、大日、阿弥陀、勢至と考える。顎は直線で非常に硬い瓦で左端に範痕と思われる傷が見える。A5区T1の攪乱より出土した。

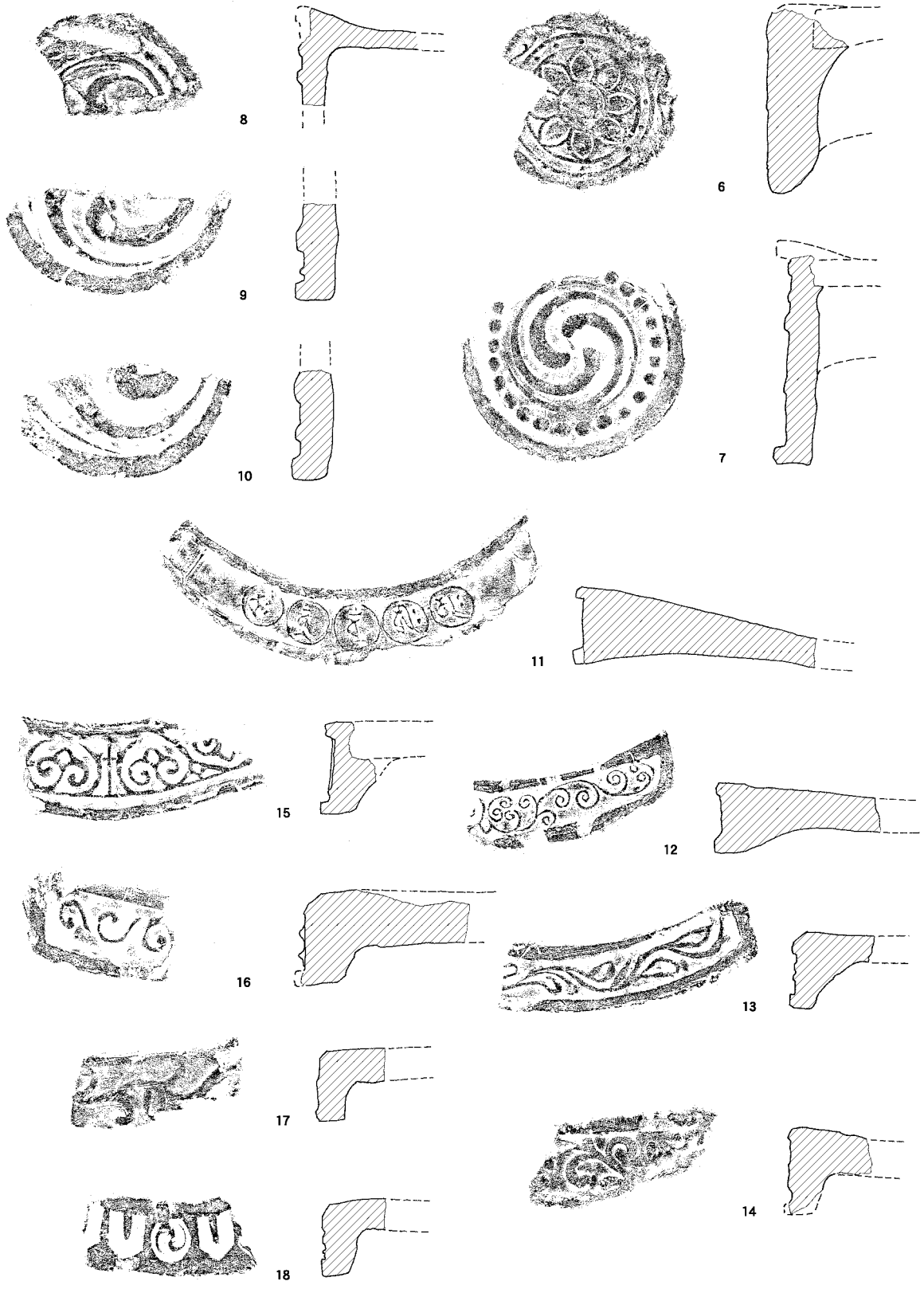
均整唐草文軒平瓦（12） 曲線顎を呈し三葉蕨手文が外方へ展開していくもので、東播産であると思われる。A6区T2の攪乱より出土した。

偏行唐草文軒平瓦（13） 左から右へ展開する偏行唐草文で、文様ははっきりとしており、硬質である。胎土に石英、長石が非常に多い。瓦当部は折り曲げた後、裏面に粘土を補強している。A5区T2の土壌14より出土した。

偏行唐草文軒平瓦（14） 右から左へ唐草文が展開していくもので、線は太くてたくましい。文様には布目痕が付面全体に及んでいる。焼成は軟質で多孔質である。瓦当部は厚くこれを直角に折り曲げている。A5区T2の土壌14より出土した。

均整唐草文軒平瓦（15） 中央部に「+」字文が入り、左右に変形した唐草文があり両方に展開していく。裏面にはベンガラが少し残り、包み込み技法で非常に硬い瓦である。A5区T2の土壌14より出土した。

唐草文軒平瓦（16） 独立した唐草文が反転しながら外方へ展開して行く、凹面は剥離して多孔質を呈し太い瓦を折り曲げて瓦面を造りだしている。A5区T2の土壌14より出土した土。

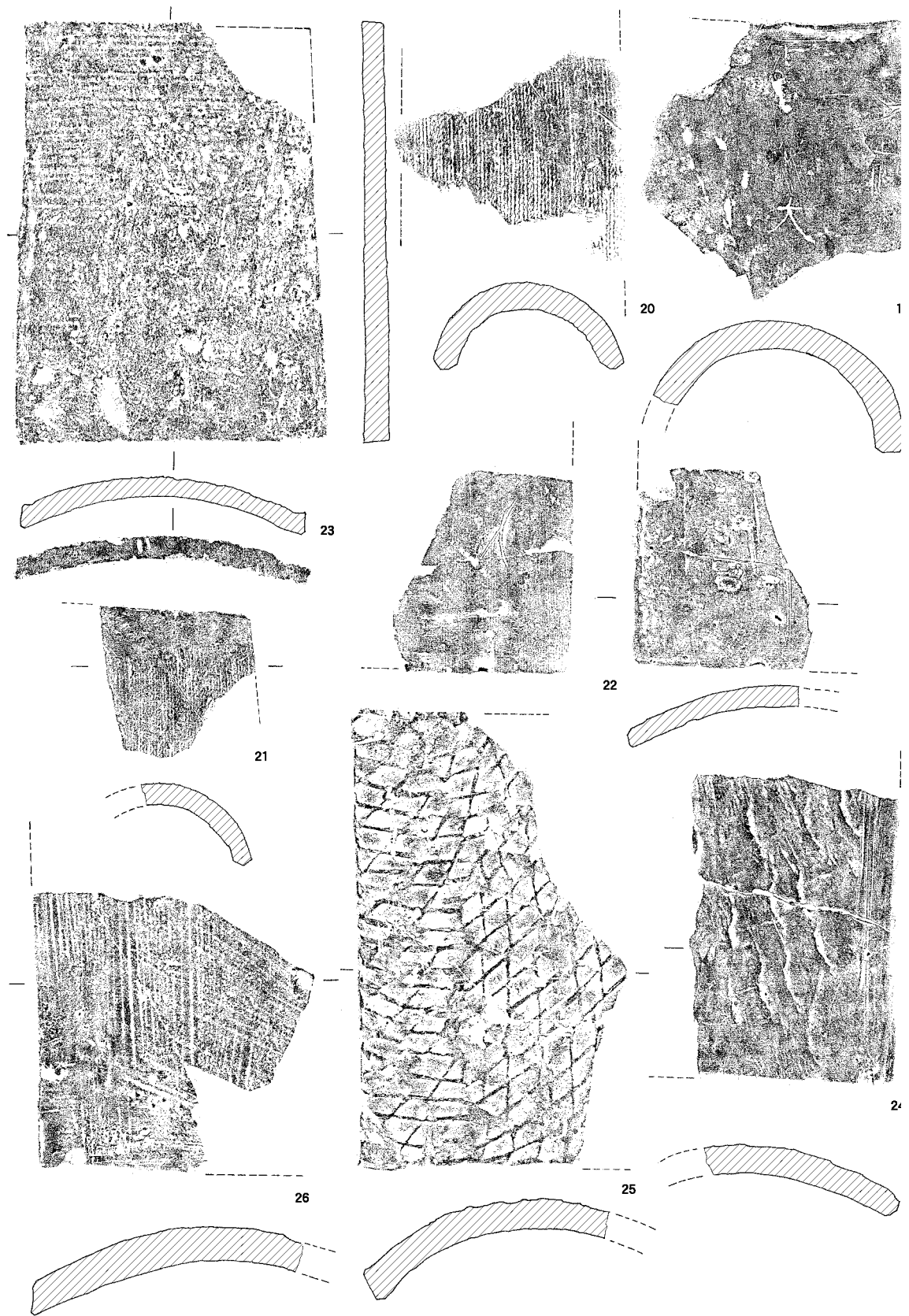


A 4区T 1 攪乱 : 6
 A 5区T 2 土壤14: 7 · 13~16
 A 5区T 1 攪乱 : 8~11

A 6区T 2 攪乱 : 12
 A 6区T 1 攪乱 : 17
 A 5区T 1 土壤16: 18



图 8 軒瓦拓影·实测图 (1 : 4)



A 5区T 1 土城16 : 19~21・23
A 5区T 2 土城14 : 22・24・25
A 4区T 5 攪乱 : 26

0 20c

图9 丸瓦・平瓦拓影・実測図(1:4)

唐草文軒平瓦（17） 唐草文が右へ展開していくものであるが、磨滅がかなり進行して文様が明確でない。凹部に細い布目残り凸部に指圧痕の残る折り曲げ技法の瓦である。A 6区 T 1 の攪乱より出土した。

巴文剣頭文軒平瓦（18） 中央に右巻きの二つ巴文を配し、両脇へ剣頭文が続く荒い布目の折り曲げ技法で曲げられているが、瓦面には布目はつかない。瓦面の上面と顎部を強く削っている。A 5区 T 1 の土壌16より出土した。

丸瓦・平瓦（図9、図版10）

丸瓦（19）は、凸部に「大」とヘラ描きされているものである。A 5区 T 1 の土壌16より出土した。

丸瓦（20）は、凸部に「x」の細いヘラ描きが縄目叩きの後に描かれている。A 5区 T 1 の土壌16より出土した。

丸瓦（21）は、凸部に「八」字様のヘラ描きがみられる。A 5区 T 1 の土壌16より出土した。

平瓦（22）は、凹部に「人」字様の太いヘラ描きがみられる。A 5区 T 2 の土壌14より出土した。

平瓦（23）は、広端部に「二」字様の陰刻が押されている。凸部は叩きを荒くすり消している様に見える。A 5区 T 1 の土壌16より出土した。

平瓦（24）は、凸部に板様の叩きで左から右へ連続叩きをして波状に見える。A 5区 T 2 の土壌14より出土した。

平瓦（25）は、縦の長さ31cmの荒い斜格子叩きの平瓦で、白い砂が多い。布目はやや細かい。A 5区 T 2 の土壌14より出土した。

平瓦（26）は、粘土板からの切り離し痕が強く残り、その後に縄目叩きを施している。A 4区 T 5 の攪乱から出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代前期	土師器	少量		少量	0箱
平安時代後期	土師器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	34箱	土師器5点、軒丸瓦5点、軒平瓦8点、丸瓦3点、平瓦5点	1箱	31箱
近世	染付、瓦、金属製品	少量		0箱	少量
合計		34箱	26点（2箱）	1箱	31箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. ま と め

各トレンチの土層状況をみると、GL - 0.5m前後まで歩道設置のための盛土があり、その下には、旧路面とみられる固くしめる砂泥層などがみられた。その下は、白川による自然堆積層である砂層や砂礫層が全体に広がっていることがわかる。二条通西半部には、この砂礫層にかわって黒褐色系の砂泥層の堆積が広がっていることがわかった。これらは、周辺の調査結果から法勝寺の基盤層となるものであることは明らかである。

今回の調査は、六勝寺の主要寺院であった法勝寺跡の中心部を東限から西大門にぬけ、さらに北に折れて北上して法勝寺西限に沿うものである。そのため重要遺構の発見が期待された。しかし歩道部分であるため何回も掘り返されていたり、コンクリートの側溝がそのまま埋められていたり、近代になって何回かのイベントに関する工事があつたりして、かなりの削平と整地が繰り返されたため、成果を得ることができなかった。それでも二条通南歩道においては、2ヶ所で平安時代の遺構を確認した。A5区T1の土壌16には多量の瓦と少量の土器(図7)があり12世紀中頃を示していた。またA5区T2の土壌14には軒瓦が多く入っていた。ここ以外の特に金堂の東側では遺構や残存遺物もなかった。そのため遺構はすべて法勝寺金堂の西側に集中していることがわかった。そのことは東半部がもともと高い地形であつたり、その部分が集中的に削平された結果、白川⁴⁾の地山がすぐに現れ遺構・遺物も確認できなかったものと思われる。それでも一部では整地土と思われる所もあつたが、明確な遺構を見いだすことはできなかった。

註

- 1) 奈良国立文化財研究所編「尊勝寺跡発掘調査報告」『平城宮跡第一次 伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第十冊 真陽社 1961年
- 2) 内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3) 杉山信三・梶川敏夫「法勝寺金堂跡発掘調査概要」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 4) 白川扇状地と白川砂

白川扇状地は、現在の岡崎一帯に広がっている。本来の白川は、幾筋もの流れに分かれ、川幅に比し水深の浅い流れとなって、網状流を形成していた。この中にできる砂層は水流等によってできる一続きの地層の中でも細かく斜交したレンズ状を呈した葉理(ラミナ)となっている。

白川砂は、花崗岩が風化分解した、「まさ」が堆積したもので、主に石英、長石類などの無色鉱物からなり、細かな黒雲母を含む。粒径は3～5mmで、地質学的には砂ではなく礫に分類される。この砂の流入する白川は、河床が白くなり平安時代にはすでに白川と呼ばれていた。疏水ができるまでは、この白い砂(まさ)は祇園あたりまで流入していた。

参考文献：『地質学研究』Vol.53 No.3 (財)益富地学会館 2004年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらかわがいくあと・おかざきいせき							
書名	白河街区跡・岡崎遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-17							
編著者名	吉村正親・長宗繁一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しらかわがいくあと・ 白河街区跡・ おかざきいせき 岡崎遺跡	きょうとしききょうく 京都市左京区 おかざきみなみごしちょう・ 岡崎南御所町・ おかざきほうしょうじちょう 岡崎法勝寺町	26100	417 418	35度 00分 37秒	135度 47分 24秒	2005年1月 11日～2005 年3月9日	182㎡	配水管布 設替工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
岡崎遺跡	集落跡	古墳時代		土師器				
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代	土壇	土師器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-17

白河街区跡・岡崎遺跡

発行日 2005年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961